裁においても敗訴した。しかし菊田の実子斡旋の問題提起に始まる論争は昭和六十二年特別養子制度として実を結び、その後の母体保護法の改正にもつながった。法的な論争では勝つことができなかった菊田であるが、マザー・テレサとの出会いや、マザー・テレサに続く世界生命賞受賞者として、日本の法体系を越えたところで評価された。生殖医療の進歩に倫理問題と科学的技術の発展が絡み、法体系の混乱の整理が進まない今日であり、菊田の提起した問題は現在も存在する。

四医師の伝記を読み紹介として要約したが、著者の筆から感じられる四人に共通する徳は、信じたことを貫いて仕事をしたことであり、そこには必ずその信念を実現させる志を同じくする者があったことであろう。そしてその仕事は、日本においてよりも海外で早くに高く認められたことを書き込んでおられる。鈴木氏の本著が四人のつくった医療の歴史を日本が忘れないために、そして日本人に勇気を与えてくれることを期待する。

（渡部　幹夫）

〔時空出版、〒一一二―〇〇〇二東京都文京区小石川四―一八―一二　電話〇三―三八一二―五三一三、二〇〇六年四月二〇日、B六判、二一八頁、本体価格二〇〇〇円〕

編集後記

本年の五月から、編集委員長を仰せつかっている。日常的に生じる大小さまざまな問題に手際よく対処してこられた真柳誠氏のあとを引き継ぐことになるが、今後も良質の雑誌を円滑に発行していくために、多くの方々からの投稿をお願いしたい。投稿促進のために前委員会以来いくつかの方策を講じてきたのでご紹介する。一つは、査読の迅速化である。査読を依頼するときに三〇日以内に終えていただくようにと期限を設定した。第二は、本年の総会でも報告された、一〇頁超過分と図版製版代の著者負担の減額である。科研費による学会誌の刊行助成と印刷費の費用節減のおかげで可能になった。些細なことに見えるかも知れないが、著者としての欲求不満を減らしていただけるのではないだろうか。

日本医史学雑誌は、毎年開かれる学術集会とともに、日本医史学会の学術活動を支える大きな柱である。最近の学術・研究がしだいに専門領域を狭めていく傾向のある中で、医史学の守備範囲は古代から現代まで、西欧からアジアそして日本までときわめて幅広いことが、特徴であり大きな魅力になっている。さまざまな背景を持った研究者からの投稿によって、このmultidisciplinaryな学会が真に活性化されることを願っている。

（坂井建雄）